アートがもっと楽しくなるマガジン

フムフム

FUMU FUMU 18

2023.09

Casié

FUMU-FUMU

vol.18

名もなき日常を
おかしく、かわいらしく

Artist Interview 室伏 志保

作品特集 Art × Episode

Casie スタッフの「アートな小噺」

レポート「KAG#1」@Berlin

アートライフを気軽に楽しむ

Casié

名もなき日常を
おかしく、かわいらしく

Photo Kiruke
Design Mayumi Ishikawa
Text Sotaro Yamada
Edit Miwo Tsuji

Casie Artists Long Interview vol.4 SHIHO MUROFUSHI

Shiho Murofushi

室伏 志保

静岡県出身、埼玉県在住のアーティスト。ささやかな喜びやおかしみを感じる日常のひとコマを切り取ることを得意とする。風景、静物、さまざまなものをモチーフにするなか、特に人気がある「白い犬」シリーズは、独特のユーモアとかわいらしさで観る人を笑顔にする。

そんな室伏さんが本格的なアーティスト活動を始めたのはここ数年のこと。普通科の大学を卒業し、アートとは関係ない会社員生活を長年続けた後、一念発起して美大に編入。現在は画業に専念しているという。彼女はいかにして「アーティスト」になったのか？室伏さんのこれまでとこれからに迫ります。

《あっ… / Oh, no...》室伏 志保

—室伏さんがものづくりに興味を持ったのは、ご両親の影響が大きいそうですね。

室伏　そう思います。私はひとりっ子だったので、小さい頃は母と遊ぶ時間が長く、一緒にどんぐりを拾って顔を描いたり、落ち葉を集めて画用紙に貼ったりしていました。母は若い頃、趣味で油絵を描いていたんです。一方、父は工作が好きな人で、よくＤＩＹをやっていました。両親ともに自分で作るのが好きな人だったので、ものづくりは幼い頃から身近で、自然と好きになった気がします。

—当時は他に、どんな遊びが好きだったんでしょうか？

室伏　ままごとが大好きでした。すごく覚えているのは、友達とリカちゃん人形で遊ぶ際、輪ゴムで焼きそばを作った時のこと。輪ゴムって、茶色以外にも、緑や赤のものもあるじゃないですか。あれをはさみで切って、並べて焼きそばに見立てたんです。このアイデアを思いついた時、子どもながらめちゃくちゃ興奮して。そうやって家にあるものを工夫して、ままごとにリアリティを追加することが最高に面白かったですね。今、部分的にリアリティを追求するような絵を描いていますが、考えてみれば、子どもの頃から似たようなことをやっていたのかもしれません。

—絵を描くのが好きになったのはいつ頃ですか？

室伏　小学校に入った頃で、両親を漫画っぽくユーモアを込めて描くのが好きでした。ぽっちゃりしたお父さんと痩せたお母さんという組み合わせがキャラクターとして面白くて。今描いている絵のベースになっていると思います。そうやって描き溜めた絵を並べて、家の中でプチ展覧会をして遊んでいました。

—高校卒業後は、美大ではなく、慶應義塾大学に入学したそうですね。

室伏　美大に行きたい気持ちはあったけれど、知識もなかったし、予備校に行くことも知らず、ちょっとイラストを描いていたくらいの自分が言い出せる進路ではないと思っていたんです。それで、ＡＯ入試で慶應の環境情報学部に入りました。大学卒業後は新規事業がやってみたかったので、新卒で人材系の某大手企業に入社。運良く社内のビジネスコンテストで賞を取り、一年目から新規事業の検討に携わることができたけれど、二年目でその事業が頓挫してしまって。その後はネット系の企画部門を経て、人事の仕事を任せてもらいました。当時は自分が不器用で消耗していることに気付いていなくて、仕事が終わって家に着いたら抜け殻みたいになっていました。疲れすぎてあんまり記憶もないんです。休みの日はずっと寝ていたし。そんな生活が二〇一二年くらいまで続きましたね。

《夕暮れの祝福 No.2》室伏 志保

後悔せずに生きるため 会社をやめて美術の道へ

—そういった生活の中、どんなきっかけで美大進学を目指すようになるんですか？

室伏　会社のある先輩が、イラストをものすごく褒めてくれたんです。「これはもっと追求した方がいいよ、ハガキのコンテストとか出しなよ」って。すごくクールで頭の良い一匹狼的な女性で、みんなが一目置いている人だったのにそういうことをたくさん言ってくれて。「やってみてもいいのかも……？」と思いつつ、まだその時は勇気がなかったし、方法もわからなかったんです。でもその後、東日本大震災のあった年に、震災とはまったく関係ないところで、歳の近い友人が突然亡くなってしまって。その出来事を機に、後悔せず生きるため、片っ端から好きなことをやろうと思ったんです。

—なるほど、それで会社をやめて美大に入ることしたんですね。美大へ通っている間は仕事もしていたんですか？

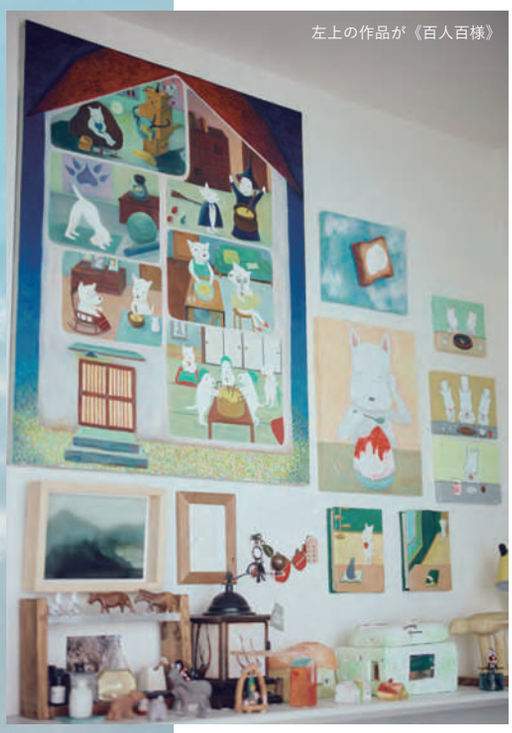
室伏　夫がはじめた古民家カフェを手伝っていました。過去にはカフェのバイトをしたこともあったし、楽しそうだったから、流れてきた船に乗ったんですね。でもやってみるとお店も大変なので、美大は休学しながら時間をかけて卒業しました。二〇一四年に二年次編入して、卒業したのは二〇二〇年。焦らせずじっくり向き合わせてくれた先生や仲間に感謝しています。

—美大に通ったことで制作への向き合い方は変わりましたか？

室伏　変わりました。絵を描くことには熱さだけではなく、画面を冷静に見る気持ちも必要だとわかったし、人の躓きを見たり自分の失敗をさらけ出したりして学ぶことができたのも貴重な機会でした。通信制の学部だったせいか、いろんな人がいましたね。私と同じようにデッサンすらしたことなかった人もいたし、すごい技術を持った妙齢の方もいたし。みんないろんなことを教えてくれて、すごく刺激的でした。

—美大では良い時間を過ごされたんですね。

室伏　でも、最初の自由課題はすごく怖かったんです。それまでクラスで同じようなものをデッサンで描いていたのに、急にみんなかっこいい絵を描いてきて。みんなの引き出しの多さに驚くとともに、自分には何もないことに焦りました。良い絵を描くということがどういうことかわからなくて。すごく考えた結果、自分にあるのは、昔から描いていた両親や友達のイラスト、日々の面白い瞬間や表情を描くことだと思ったんです。それで、最初の自由制作で描いたのが《百人百様》という作品でした。一軒家の中にいろんな人がいて、みんながそれぞれの時間を過ごしているところを描きました。


左上の作品が《百人百様》

《百人百様》の下左側の絵画はソーニャ・カンノの作品、写真右下の立体作品の数々は PS やまぐちたつやの作品

「画家はなんでも描けて当たり前」重視すべきは器用さではなくオリジナリティ

—この作品には、室伏さんのモチーフである「白い犬」がすでに登場していますね。

室伏　親や友達のイラストを描いても知らない人にとっては興味がないだろうから、何かの姿を借りて描いたほうが観てもらいやすいと思ったんです。この白い犬なら老若男女描き分けられるし、人のおかしみが描けるんじゃないかと思って。建物は、当時手伝っていた夫のお店をモデルにしています。お店を手伝っている時にいろんなお客さんに出会って、みんないろいろでかわいらしいなと思う瞬間がたくさんあったんです。そういう人それぞれの時間の過ごし方を描きたかったんですね。犬たちはみんな黄色い生地のようなものをこねているんですが、そのやり方がそれぞれ違うんです。

—魔法使いもいますね（笑）。

室伏　そう（笑）。魔法でやる子もいるし、ロボットにやってもらう子もいるし、ヨガをしている子は意識が高そうだからマシーンでやったり。美顔器をコロコロしている子は旦那さんにやらせていて、ロッキングチェアのおばあちゃんは娘にやり方を教えている。婦人会ではおばちゃんたちがみんなでやっている風だけど、よく見ると、ちゃんと混ぜているのはひとりだけなんです。

—ほんとだ！やってるフリしてます（笑）。

室伏　そういうシチュエーションってよくありますよね。でも、だからといってそれを批判しているわけではなく、それはそれとしてかわいいなと。この作品で単位を落としたらしょうがないと思って提出したのが最初の自由制作でした。

—これは高評価だったんじゃないでしょうか。

室伏　そうなんです。でもその後、迷走してしまうんですね。こういうテイストで続ける勇気がなかったというか。せっかく油絵を学びに美大に入ったんだし、油絵っぽいことを学べるのも最後かもしれないからと、普通に風景や静物を描き始めるんです。

《見てる？嗅いでる？それともちょっとかじってる？ / Looking, Smelling or Nibbling?》
室伏 志保

室伏さんの飼い犬「おこげ」

—最初にCasieに預けていただいた作品も、白い犬のシリーズではなかったですよね。

室伏　そうなんです。その頃は、買ってもらいやすいサイズで、買ってもらいやすい絵を描こうと決めて、いろんなものを描いていた時期でした。その都度、心を動かされたものを描いていましたね。ただ、個展をする中で一貫性があったほうがいいと思うようになったんです。「何を描いている人なのか」がわかるようにしたほうがいいと。そうしてこの白い犬のシリーズを再開したら、その作品を買ってくださった方がいて。ちょうどその頃、尊敬しているギャラリーのオーナーさんから「統一したほうがいい」と言われたことも大きかったです。「画家はなんでも描けて当たり前なんだから、器用なところなんか見せたってダメ」って。それで他の作品を見せない勇気をようやく持てるようになりました。

—そこからだったんですね、白い犬シリーズがメインになったのは。

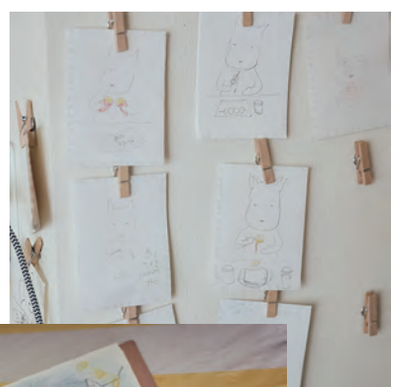
室伏　個展に来てくれる人も、このシリーズを見ている時がいちばん満足そうに時間を過ごしている気がするんです。老若男女問わず、かわいい動物を見るみたいな目で見てくれるから嬉しくて。

—犬のモチーフになったのは愛犬の影響ですか？

室伏　おこげ（愛犬）の影響もあるかもしれませんね。元々は、動物で考えた時に、猫は犬よりスマートで抜け目ない感じがしたので、ちょっとドジでかわいい部分を出すには犬がいいと思ったんです。このシリーズでは、「人の営みの、名もなきシーンのかわいらしさ」みたいなものを描けたらと思っています。それと、家に飾ってもらうことをかなり意識しているので、家に帰って見た時にニヤッとできるかどうかを大事にしています。

—「白い」犬なのはなぜですか？

室伏　二つ理由があって、観る人に自分を投影してもらうための白いキャンバス的な意味合いと、白がベースだとまわりに色々描き込んでも目立つからです。それぞれの解釈で「あるある！」と共感してもらえたら嬉しいですね。



「白い犬」の下絵

いつの間にか消えていた「世界を傍観する感覚」

—美大卒業後はすぐに画業一本での生活を始めますが、不安はありませんでしたか？

室伏　それが、なんの保証もない世界にこれから入ろうとしているのに、不思議と安心感があったんです。話を少し戻すと、美大に入って本格的に絵を描き始めるまでは、ずっと自分が世界を傍観しているって感じがあって。何かに一生懸命になっても、本当はこれは自分のものじゃない気がするというか、誰かの何かにちょっと関わっているだけみたいな感覚だったんですよね。

—ちょっと寂しいような？

室伏　そうですね。寂しいような虚しいような感覚で、世界を外側から傍観している感じでした。それが変わったのは美大の卒業の日。ちょうどコロナ禍に入った時期だったので、卒業式はなく、最後の授業でみんなで車座になってひとりずつ話す機会があったんです。何を話そうかと順番を待っている時、自分が今、世界のど真ん中にいる感じがしたんです。ずっと寂しいと思っていたけれど、気が付いたら夢中で勉強して夢中で絵に取り組んで、今はちゃんと自分が落ち着いていると感じて。そう思ったら泣けてきてしまって……。

—つまり、これからやろうとしていることこそが自分の人生なのだと理解した瞬間、ということですか？

室伏　そうなんです。絵は、うまくいってもいかなくても、本当に自分のことだという感じがするんです。たとえお金にならなくても、以前のように消耗することはない。なぜならこれは自分が本当にやりたいことだから。「誰かの何かにちょっと関わっている」のではなく「自分のこと」になったんです。そんなものを手に入れたのは初めてでした。だから全然怖くなかったんです。バイトしながらでも、どんな形でも、絵は続けられるし。

—すごい話です。

室伏　それ以来、傍観する感覚はなくなりました。本当に、卒業の日に車座になっている時にふと思ったんです。不思議ですよね。

《おだんご日和 / Nice Dango Day》室伏 志保

人の「かわいい瞬間」を伝えようとすると アイデアが止まらなくなる

—室伏さんは個展を頻繁に開催していますよね。

室伏　年に四回開催しています。今も展示が終わったばかりで、次の個展のためのメインピースを描いています。ただ、このペースだと新しいことを入れる余地がないので、来年からはひとつ減らす予定（笑）。自分はまだ名もなき存在だから、個展をたくさん開催してどんどん人に会いに行かなければと思っているんです。

—画廊めぐりも積極的だとか。

室伏　人の作品を観るのも大好きなんです。個展で在廊する作家さんから話を聞くのももちろん好きだけど、あえて他者のまなざしで選ばれた「好き」を鑑賞したり、店頭に並ぶまでのストーリーを聞くのが面白いんです。私にとってはＣａｓｉｅさんも同じ存在で、作家とキュレーターとお客さんのまなざしが交差したところでお金が動くと、とっても幸せだなあと感じます。

—描き続けるモチベーションはどのように保っていますか？

室伏　基本的に、モチベーションが下がることがないんです。制作スピードがアイデアに追いつかないからネタは尽きないし、描くことが楽しくて仕方がないので。でも人に見てもらうことはモチベーションにつながりますよね。個展の際は全日程滞在するようにしているんですが、それはお客さんの反応を見たいからなんですね。その反応によって作品の方向性を決めるわけではないけれど、やっぱりお客さんの反応を見るのは幸せな時間で。作品を見ながらニヤッと笑ってくれたり、楽しそうにしてくれたり。中には人生で初めて絵を迎える人がいてくれたりして、本当にありがたいです。

—ネタが尽きないのはなぜですか？　何を描いたらいいのかわからない状態に陥ることがまったくない？

室伏　人の「かわいい瞬間」ってたくさんあるから、思いついちゃうんですよね。その「かわいい瞬間」を伝えるためにどうするかは自然とわかるし、迷っても一筆置くと、次の手が見えてくるんです。自分の手が次を教えてくれるというか。だから止まらなくなる。でもこれは白い犬シリーズに限っての話で、それ以外のモチーフを描く場合は難しいです。美しい風景を描こうと思っても「どういうフィニッシュにすべきなんだろう？」と「べき」が浮かんでしまうから。白い犬は、描いているうちに犬が主導権を握り始めるんです。私がどう描くかより、絵が連れていってくれる感じですね。

—それもすごい話ですね。今後、制作活動を続けていく上での目標があれば教えてください。

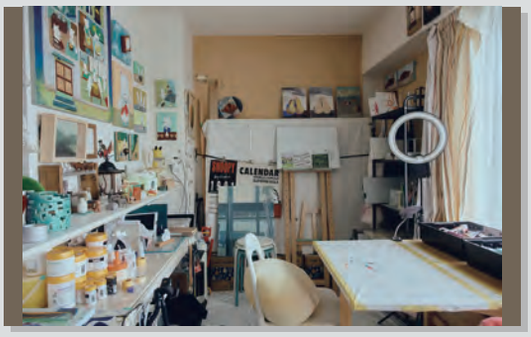
室伏　目標は決めないようにしているんです。元々は目標を決めて自分の意思で切り開いていくタイプだったけれど、夫のお店を手伝うという「来た船に乗る」楽しさを知ってからは、あまり決めないようにしています。ただ、引き続き面白いものを描きたいし、サイズの大きい作品を描きたいとは思っていますね。あとは絵本を作りたいです。

—最後に、室伏さんにとってアートとは？

室伏　「まなざし」だと思っています。作家は作家のまなざしで捉えた何かを描くし、鑑賞する人も何らかのまなざしで作品を気に入り、鑑賞したり購入したりする。アートは「その時代、その瞬間に生きた人のまなざしが残るもの」。だからこそやめられないんですよね。

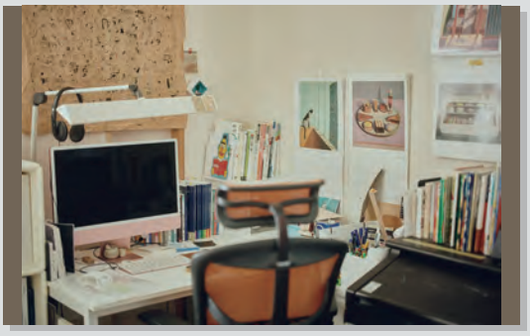
Shiho's Room

今回の取材では、室伏さんの自宅兼アトリエにも潜入。アートに囲まれたご自宅で、お気に入りのものや制作に欠かせないアイテムを紹介していただきました。



作業スペース1

ダイニングスペースを大胆に使った作業スペース。思い立ったらすぐ着手できるように、すべてワンアクションで作業ができる状態に。

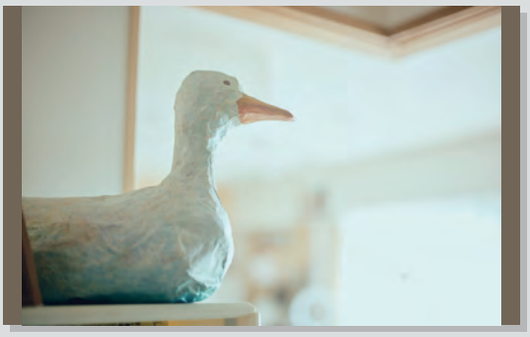


作業スペース2

こちらはもうひとつの作業スペース。パソコンを使った作業や小さな工作の他、購入者に手紙を書くなど、きれいな状態でやる作業をこの部屋で行う。

スケッチ用のノート

思いついたらどんどんスケッチする。構図を決めながら、この段階で色鉛筆で色も入れる。色を塗るとまた次の手が思い浮かぶという。

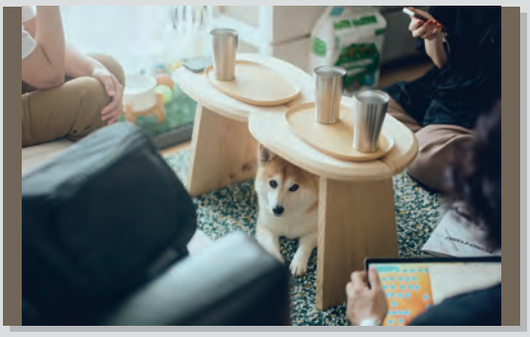


アヒル

紙で作った立体作品。W18cm×D53cm×H35、重さ696g。アヒルも室伏さんにとっては重要なモチーフのひとつで、絵画にも度々登場する。

母親が描いた絵

母親が若い頃に趣味で描いていた絵。ほぼすべての作品を知人に譲ってしまったため、手元に残っているのはわずか。北海道の風景を描いた作品。



おこげ

室伏さんの愛犬。作品のモチーフにもなっている。取材中は大人しくしてくれる良い子。あまりの愛くるしさに、編集部一同メロメロでした。

室伏 志保（むろふし しほ）

1978年生まれ、静岡県出身。2001年慶應義塾大学卒業後、大手人材系企業に入社。2013年に退職後、イメージコンサルタントのディプロマを取得し、フリーランスとして企業や個人の顧客を3年間担当。2014年に京都造形芸術大学（現、京都芸術大学）に編入学、同年より夫が経営するカフェを手伝いつつ、2020年に卒業。現在は画業一本で活動中。

作品一覧

Instagram

室伏志保個展「Solo Exhibit in November 2023 室伏志保 個展」

日程｜2023年11月22日(水)〜27日(月)
時間｜11:00〜18:00
（初日12:00より、最終日17:00まで）
場所｜並樹画廊
東京都中央区京橋2-7-12 並木ビル2F

※概要は変更となる場合がございます。
公式サイトまたはSNSなどを事前にご確認の上ご来場ください。

Check!
展覧会詳細はこちら